混合交通を観察する
DOCUMENT Eye ●series—160

●対面交通における歩行者相互、歩行者対自転車の交通行動を観察する

自転車が通行できる歩道で、1時間に歩行者対自転車の接触は2件

●観察場所／東京都世田谷区三軒茶屋駅周辺の歩道（歩行者優先／自転車通行可）
●観察日／6月18日（水曜日）
●天候／曇りときどき雨
●観察時間／18：05 ～19：05
●観察者／5名

●WHY 歩道での歩行者と自転車の関係は？

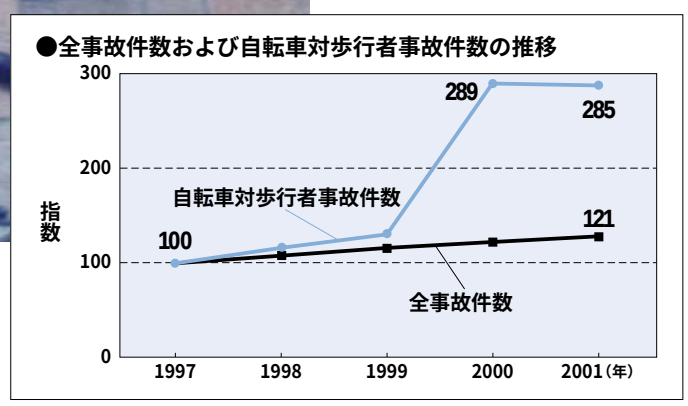
歩道で歩行者と自転車が混在している状況をよく見かける。道路交通法では、軽車両である自転車は車道の左端を通行することになっているが、通行を許可された歩道では、自転車も歩道上を走ることができる。

歩道上には多くの歩行者が存在するため、自転車対歩行者の事故が発生することも多く、国土交通省「21世紀の自転車利用環境の実現を目指して」によると、1997年に633件、2001年には1807件と、この5年間で約3倍に増加した。

また、自転車利用者が運転で不安を感じる第1位は「歩行者、自転車相互の回避方法が不明確」31％である。（総務庁資料）

平日の夕方、東京都内の駅周辺で、自転車対歩行者について観察してみた。

●全事故件数および自転車対歩行者事故件数の推移



※1997年値を100とした場合
※2001年の自転車対歩行者事故件数は駆動補助機付自転車含む
（出典：国土交通省「21世紀の自転車利用環境の実現を目指して」）

●●WATCHING 2人以上歩行者が並ぶと自転車がよける

観察場所は、東京・世田谷区の三軒茶屋駅周辺にある歩道。観察日は雨が降ったり止んだりという天候のため、傘を持つ人が多かった。歩行者は主婦や小中学生、学生、社会人、高齢者と多岐にわたる。歩道上には両方向から絶え間なく歩行者が往来している。この状況のなかでかなりの台数の自転車が歩行者の間を走り抜けて行き、歩行者が思わず立ち止まったりする光景も観察された。

観察地点のひとつであるバス停付近では、バスを待つ人々の列が伸びて歩道のスペースが狭まってしまっていた。歩行者の多くは周辺の状況を察知して、自発的に立ち止まり、交互に通過するなど、マナーが守られていた。しかし、2人以上で話をしながら歩いている場合は、横に広がってしまい、対面する歩行者を自転車がよけるということが多かった。また、1人でも傘をさしながら携帯電話でメールチェックや話をしている姿も多く見かけた。

観察中に、歩行者同士の接触が7件、歩行者対自転車の接触が2件、自転車同士の接触が2件あった。歩行者同士の場合および自転車同士の場合では、いずれも傘と傘が接触した程度だった。歩行者対自転車の接触例のひとつは、2台の自転車で並走してきた小学生のうちのひとりの肩が、避けようと立ち止まった50代とみえる女性にぶつかってしまった例で、小学生はそのまま走り去ってしまった。もうひとつの例では、自転車同士が正面衝突しそうになり停止、片方の自転車が進路を変えようとしてハンドルを切ったとき、自転車の前輪が後方から来た20代とみえる女性の足に当たってしまったもの。このときは自転車の男性が「あっ、スイマセン」と声をかけていた。

●対面通行中の歩行者、自転車の接触数

	歩行者対歩行者	歩行者対自転車	自転車対自転車
接触した	7例（14人）	2例（4人）	2例（4人）
接触しない	1,143人	58人	49人

※1時間に観察できたものについて記載

2人ならんで話しながら歩く人が多い

携帯電話を見ながら歩く歩行者

●●●PROPOSE 「ゆずりあう気持ち」を歩行者 自転車ともに持とう

混雑した歩道上では、人々の往来だけでなく放置自転車などの障害物もあるほか、子どもや高齢者の自転車や車椅子の方なども通行している。

歩行者において、2人以上で話しながら歩く人たち、携帯電話で話しながら歩く人が他者に迷惑をかけているように見えた。一方、自転車の利用者は運転者として、交通弱者となる歩行者の動きに十分注意して徐行しながら走行して欲しい。歩行者・自転車とも基本は「ゆずりあい」、「よく見る・見られること」であることを再認識して欲しいものである。